

地域共生社会の実現へ— 医療的ケア児の社会参加を支える「インクルーシブ・ エンターテインメント」の全国展開

認定特定非営利活動法人 AYA



「映画 in 福岡」集合写真

要旨

病気や障がいのある子どもとその家族は、体調急変への不安や周囲への気兼ねから、外出や社会体験をあきらめてしまう現状にある。特定非営利活動法人 AYA は、医療従事者がイベントに帯同し、家族と企業の架け橋となることで、安心して家から一歩外へ踏み出せる環境を整えている。2026年3月26日現在、全国47都道府県において188回のイベントを開催し、延べ2万5304名の親子にスポーツや文化芸術等の体験を届けてきた。本活動は、医療的な知見を背景に、家族が自らの意志で体験を選び、人生の彩りを増やしていける社会を目指している。既存の施設を活用した持続可能な仕組みにより、地域社会におけるインクルーシブな環境づくりを全国で推進している。

地域医療貢献のポイント

医療従事者が社会活動の現場に介在することで、家庭から外へ出る際の心理的・物理的障壁を低減し、日常的な社会参加を実現した。家庭や病院にとどまらない豊かな体験を支え、家族の孤立を防ぐ新たな地域支援の形を提示している。

1. 背景と目的

現代の医療技術の進歩は、かつては救命が困難であった多くの命をつなぎ止めることを可能にした。その一方で、病気や障がいと共に生きる子どもたちの退院後の生活、とりわけ家庭から一歩外へ出て経験する体験の質については、いまだ十分な社会的基盤が整っているとは言い難い。日本国内には、身体、知的、精神障がいや難病、あるいは日常的な医療的ケアを必要とする子ども



インクルーシブ映画上映会上映中の様子



インクルーシブ映画上映会上映前の笑顔



インクルーシブ映画上映会終了後の様子

ちが、少なくとも70万人存在すると推計されている。これらの子どもたちとその家族にとって、スポーツ観戦や映画鑑賞、文化芸術体験といった日常的な社会活動は、心理的、物理的な障壁により、極めて参加ハードルの高いものとなっている。

家族に外出を躊躇させる要因は、本人の身体的状況のみにとどまらない。出先での急な体調変化に対する不安や、周囲への気兼ね、あるいは会場側の受け入れ態勢が不明瞭であることなど、複数の要因が重なり合っている。その結果、子どもたちのやってみたいという意欲や、家族全員で思い出をつくりたいという願いが日々の選択肢から消え、構造的な体験格差が生じている。こうした体験の不足は、子どもの自己肯定感

や社会性の形成に影響を及ぼすだけでなく、介護を担う家族全体の社会的な孤立を招く要因となっている。

当法人は、この格差を解消し、どのような状況にあっても人生を彩る豊かな体験を享受できる社会を目指して設立された。代表の中川悠樹は、現役の医師として現場に立つ中で、治療の先にある子どもらしい時間を保障する重要性を痛感した。本活動の目的は、医療従事者が社会の側に立ち、家族と企業の双方の不安を安心に変える架け橋となることで、誰もが当たり前前に社会の一員として活動できる基盤をつくることにある。医療の専門性を病院内にとどめず、地域社会の体験と結びつけることで、子どもたちの可能性を広げる一助となることを目指している。



インクルーシブ音楽祭でのアンコールの様子



インクルーシブ音楽祭でのワークショップ「マラカスタネットを作ろう」



音楽祭でのスタッフと参加者の様子



プラネタリウムでの様子

2. 活動内容と成果

当法人の活動の軸は、映画鑑賞、スポーツ観戦、文化芸術体験といった、日常的でありながら病気や障がいのある家族には参加のハードルが高い分野において、安全でインクルーシブな機会を創出することにある。具体的な運営手法として、映画館やスタジアムの座席の一部、あるいは施設全体を貸し切ることで、参加者が周囲に気兼ねなく過ごせる環境を整備している。例えば映画鑑賞会においては、暗闇や大きな音を苦手とする特性に配慮し、場内の照明を明るめに保ち、音量を通常より抑えるなどの微細な調整を行っている。

また、すべてのイベントにおいて医師や看護師などの医療従事者が会場に常駐、帯同する体制を構築している。これにより、重度な障がいや医療的ケアが必要な家族であっても、不測の事態を恐れることなく、安心して参加できる環境を実現している。本活動の独自性は、専用の施設を新設するのではなく、既存の商業施設やエンターテインメント企業と連携し、その既存資産を福祉的に活用する点にある。社会の既存インフラの中に、誰もが共存できる場を一時的に、かつ継続的に作り出す試みである。企業側にとっても、当法人が介在することで、これまで接点の少なかった層への理解を深め、インクルーシブな接遇を具体的に学ぶ契機となっている。

2022年1月の活動開始以来、2026年3月26日までに、全国47都道府県において計188回のイベントを開催し、延べ2万5304名の家族に体験の場を届けてきた。短期間での全県実施を支えたのは、各地の医療機関、自治体、民間企業、そして地域のボランティアとのネットワークである。

これらの活動による成果は、



運動フェスでの「eSports体験」



運動フェスにおける活動の様子

単なる参加者数という数値にとどまらない。参加した家族からは、家から外へ出る自信がついた、家族全員で笑い合える時間を過ごせたといった声が寄せられている。医療的なバックアップという安心の担保を得ることで、主体的に社会との接点を持ち始めるという行動変容が見られている。これは、医療が単に疾患を治療するだけでなく、患者とその家族の生活の質を向上させ、地域社会とのつながりを再構築するという、広義の地域医療への貢献であると捉えている。

3. まとめ／今後の展望

当法人の活動は、病気や障がいのある子どもと家族にとって、社会参加が自らの意志で選択できる日常であることを具体的に示してきた。

今後の展望としては、本活動を一時的な行事から、地域社会における持続的なインフラへと定着させることを目指す。大規模なハード改修を伴わずとも、医療従事者の帯同や運営上の工夫というソフト面の配慮により、既存施設をいつでもインクルーシブな場へ転換できるモデルを標準化していく。これにより家族がイベントを待つのではなく、地域の映画館やスタジアムへ、いつでも当たり前に出かけられる環境整備に寄与したい。

また企業連携においては、ビジネスのアセットを社会課題解決に活用する仕組みをさらに強固にする。ボランティアの善意のみに依存せず、企業が多様な顧客層を迎え入れるための専門的パートナーとして機能することで、経済活動と福祉が循環する持続可能なモデルを確立していく。

活動の根底にあるのは、医療の専門性を社会へ開放し、子どもたちの人生に彩りをもたらす一助となることだ。すべての子どもたちが地域社会で豊かに生まれ、社会の一員として笑い合える時間を保障すること。今後も全国ネットワークを基盤とし、すべての子どもたちが未来を描ける社会の実現に向け、着実に取り組みを進めていく。



サッカーエスコートキッズ



小笠原プロジェクトでの海体験